高等学校专业日语高年级用日语

日语

（下）

程文新　主编

四川大学出版社

H3
H5

高等學校專業日語高年級用教材

日語

（下）

副主編　陶法義
主編　胡德友
程文新

四川大學出版社

(川)新登字 014 号

责任编辑:叶　声
封面设计:冯先洁
技术设计:罗庆华

高校专业日语高年级用教材

日　　语(下)

主　编　程文新
副主编　胡德友　陶法义

四川大学出版社出版发行　　(成都市望江路 29 号)
四川省新华书店经销　　郫县犀浦印刷厂印刷
开本 850×1168mm 32 开本　12.875 印张　275 千字
1994 年 6 月第 1 版　　1994 年 6 月第 1 次印刷
印数:0001—1100 册
ISBN 7－5614－1063－8/H・49　　定价:8.30 元

编者说明

编者从本校日本语专业三、四年级的十多年的教学实践出发，同时考虑到高校教育改革的实际情况和同类院校的教材需求情况，从八十年代起便在来校任教的各届日本专家的协助下，经过近十年的大量参阅、分析试用、比较认定的结果，从日本国家规定的初高中「国语」教科书中精选出具有代表性的不同体裁的名家文章，按一定的比例编成了本套教科书。

精选出的课文有小说、诗歌、随笔、戏剧、演说、游记等各类文章。本教科书编成后，经来校任教的日本专家、日本留学生和有关教师审读后，均一致认为，选到了精华，深广适度，比例合理，是适合中国学生学习的理想教材，能全面增强其读解、分析、鉴赏各类日本语文章的能力；学习本教材，可为今后从事中日交流的翻译工作和研究日本语

言文学打下更加良好的基础。

本教材共上下两册，分别供大学日本语专业三、四年级学生使用。每课教学时间平均约为十二学时。上册共二十个课文和六篇附录资料，下册共十六个课文和两篇附录资料。为便于使用，编者在每个课文(有的课文后附加有副课文)后编写了「难语句」、「注释」、「笔者」、「学习与研究」等项内容。因此，本教材也适合于具有中级以上日本语水平的、有心攻读日本语言文学的有志者自学使用。

本套教材上册主编胡德友，副主编程文新、陶法义，下册主编程文新，副主编胡德友、陶法义。上下两册均请日本语言文学专家關口稔夫先生和小野芳幸先生仔细审校。另外，还得到日本语言文学专家林静雄先生、日籍老师宫崎博美老师以及中国日语教师王蕾老师等许多中日同行和朋友们的热情支持和帮助，在此谨表示衷心的感谢。

因编者水平和经验有限，欠妥之处在所难免，恳请同行专家及读者诸君批评指教，以便日后补遗修正。

编　者

一九九四年四月于四川大学

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

第一課　課文　民族と文化……本多　勝一　一
第二課　課文　ものまね――しぐさの日本文化……多田道太郎　一四
第三課　課文　対馬幻想行……橋川　文三　二二
第四課　課文　富嶽百景……太宰　治　四〇
　　副課文　薄明……太宰　治　六二
第五課　課文　城の崎にて……志賀　直哉　七九
　　副課文　小僧の神様……志賀　直哉　八九
第六課　詩六篇
　一　「鹿」……村野　四郎　一〇四
　二　「紙風船」……黒田　三郎　一〇四
　三　夕焼け……吉野　弘　一〇五
　四　「わたしを束ねないで」……新川　和江　一〇八
　五　落葉松……北原　白秋　一一〇
　六　千曲川旅情の歌……島崎　藤村　一一三
第七課　課文　短歌の世界……玉城　徹　一二二

第八課　課文　羅生門……芥川龍之介　一三三
副課文　鼻……芥川龍之介　一四七
第九課　課文　山月記……中島　敦　一五七
副課文　悟浄歎異　――沙門悟浄の手記――……中島　敦　一七一
第十課　課文　科学と人生論……湯川　秀樹　一八七
第十一課　課文　海の掃除屋……奥野良之助　二〇七
第十二課　課文　舞姫……森　鴎外　二二三
第十三課　課文　宮沢賢治……森　荘已池　二五八
第十四課　古典六篇
一　氷魚……宇治拾遺物語　二七一
二　なよたけのかぐや姫……竹取物語　二七二
三　おくのほそ道……松尾　芭蕉　二七四
四　これも仁和寺の法師……徒然草　二七六
五　土佐日記（その一）……紀貫之　二七七
六　土佐日記（その二）……紀貫之　二七九
第十五課　漢詩五首
一　早発白帝城……李　白　二八一

二　春望……李　白　二八一
三　山行……杜　牧　二八二
四　江雪……柳宗元　二八二
五　売炭翁……白居易　二八三
第十六課　課文　時の氏神……菊池寛　二八五
付録　一　日本近代文学の流れ……高田瑞穂　三一八
付録　二　当用漢字音訓表……三四四

第一課　民族と文化

本多勝一

アイヌ民族出身の民俗学者萱野茂さんは、長生きをした祖母にアイヌ語で育てられたせいもあって、この世代としてはアイヌ語を自由に話す稀有の人である。あるとき萱野さんは、旭川市で開かれた中国物産展を見に行った。たまたま会場にいた中国人たちが何かで内輪もめとなり、中国語で口論になった。しばらくそれを見ていた萱野さんは、いっしょにいた仲間に嘆息しながら言ったという。――「おれたちもあんなふうにアイヌ語でケンカできたらどんなに幸せだべなあ。うらやましいなあ。」

この話を萱野さん自身から最近聞いたとき、萱野さんを前にしたまま、わたしはしばらく黙り込んでしまった。間もなく中学校を卒業しようとする諸君に贈る言葉として、このときわたしが思ったことを少し書いてみたい。

かつてアラビア半島の奥地、サウジアラビアのサバクに、ベドウィン遊牧民の生活を取材するため住み込んだことがある。サバクの生活を切りあげて首都リヤド市に帰り、ホテルに泊まっていたとき、わたしの部屋は三一四号室だった。ある日のこと、受付で自分の番号を言ってカギをもらい、部屋の前まで行ったとき、カギは別室（三一六号）のものであること

に気づいた。受付に戻ってカギの番号を見せながら、「部屋に入れませんでしたよ。」と、相手を責めないための心づかいで、わたしは微笑しながら言った。全く予期しなかった答えが返ってきた。――「あなたが間違った番号を言ったのです。」

わたしが予期していたのは「や、これは失礼しました。」というひとことなのだ。このとき、もしわたしが初めてアラブと接したのだったら、「あるいは自分が違った番号を言ったのかもしれない。」と思っただろう。しかし既に彼らのものの考え方をサバクで学んでいたわたしは、「まさにベドウィン的だ。」と思っただけであった。ベドウィン的な考え方によれば、自分の失敗を認めることは無条件降伏を意味する。例えば皿洗いの仕事をしている人が百円の皿を割って、もし自分の過失を認めたら、相手がベドウィンなら弁償金を千円要求するかもしれない。だから皿を割ったアラブは言う。――「この皿は今日割れる運命にあった。おれの意志と関係ない。」

これが日本ならどうだろう。普通の日本人だったらこの場合直ちに言うにちがいない。――「まことにすみません。」丁寧な人はさらに、「わたしの責任です。」などと追加するだろう。それが美徳なのだ。しかしこの美徳は、世界に通用する美徳ではない。まずアラブは正反対。インド人もアラブに近いだろう。フランス人だと「イタリアの皿ならもっと丈夫だ。」というようなことを言うだろう。

わたし自身の体験では狭すぎるので、多くの知人・友人または本から、このような「過失

に対する反応」の例を採集した結果、どうも大変なことになった。世界の主な国で、皿洗いの人が皿を割って直ちに謝る習性があるところは実に少ない。「わたしの責任です。」などとまで言ってしまうお人好しは、まずほとんどない。日本人とアラブとを正反対の両極とすると、ヨーロッパ諸国は真ん中よりもずっとアラブ寄りである。中国やベトナムもしかり。ただしヨーロッパでは、自分が弁償するほどの事件にはなりそうにもないささいなこと（体に触った、ゲップをした、など）であるかぎり、「すみません」を日本人よりも軽く言う。この謝罪は、「謝罪」というよりもむしろ一種の習慣である。習慣だからこそ、社会をスムースに動かす潤滑油として大切なのだ。

だが、日本人と確実に近い例を私は知っている。それは、かつて訪れたことのあるニューギニアのモニ族や北極地方のエスキモーである。モニ族は、わたしのノートを誤って破損したときでも、カメラのレンズに土を付けたときでも、直ちに「アマカネ（すみません。）」と言って恐縮した。そして、さまざまな国の歴史を比較検討してみると、おおざっぱにいってこんな傾向のあることがわかる。――「異民族の蹂躙による悲惨な体験をもった民族ほど、自分の過失を認めたがらない。」

日本人やエスキモーやモニ族は、異民族による蹂躙の恐ろしい体験を、一部を例外として、歴史上あまりもたなかったようだ。

基本的なものの見方について考えると、ベドウィンの特徴、ひいてはアラブの特徴は、日

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

本の特殊性よりもずっと普遍的なのだ。わたしたちの民族的性格は、アラブ諸国やヨーロッパや中国よりも、ニューギニアにより近いとさえ思われる。探検歴の最も豊富な日本人の一人、中尾佐助教授にこの話をすると、教授は言った。――「日本こそ世界の最後の秘境かもしれないね。」

わたしがアラビア半島から帰国して間もなく見た新聞に、「もう泣き寝入りすまい」という投書が載っていた。交通事故で、自分が悪くないのに謝ったりしては大損だという体験談である。アラブがあれを読んだら、そのあまりにも日本的な現象に驚きあきれるだろう。

民族が違うと、ものの考え方もこのように違う。それは日本とアラブと「どちらが良い（あるいは悪い）」ということではなく、「違う」という事実が重要なのである。

普通わたしたちは自分のことを「日本人」と規定している。しかし日本人としてのわたしたちとは、具体的にはどういう民族なのだろうか。どこの国にかぎらず、自分たちの民族的性格や特徴は案外知らないものだ。何かを知るということは、その「何か」を「他」から識別し、取り出すことでもある。まず「他」を知らなければ「何か」を識別することはできない。わたしたち自身を知るためには、他民族を知ることがその第一歩なのだ。地球上のさまざまな民族と接してみると、わたしたちがあたりまえと思っていることが他民族には全く通用しない例がよくある。そうした事実を知って初めて、わたしたちは自らを客観化し、知る

ことができるようになる。

簡単な例を挙げよう。わたしたちがコメと言うとき、それは煮る前のコメツブのことであって、食べるときのメシ（ゴハン）のことではない。しかし英語ではどちらもriceである。

もう少し複雑な例を挙げよう。魚のブリは、日本語だとその成長段階に応じてシオワカナ、ツバス、ワカナ、ハマチ、メジロ、モンダイ、ブリ（明石地方の場合）とよび分ける。しかし英語ではすべてyellowtailだ。

もっと複雑な例として、ベドウィンによるラクダのよび方がある。日本語では「ラクダ」の一語だが、アラビア語ではその各成長段階はもちろん、［乗用］や「荷運び」のような用途別、さらに「妊娠したラクダ」「草を食っているラクダ」など、実に二百とおり近くもの単語に細分されている。エスキモーの場合は雪がそれに当たるだろう。「激しく吹き付ける雪」「吹きだまりの雪」「地面を広く覆う雪」「飲料水用に溶かすための雪」といったさまざまな状態・用途に応じて、大変細かく命名されている。

なぜこのような違いができるのだろうか。それは例えばエスキモーにとっての雪の場合、日本人にとっての雪とは比べものにならぬほど生活と密接に結び付いているからである。エスキモーが生きてゆくためには、北極地方の風土を支配する雪への深い関心がなければならず、関心が深ければ深いほどその対象を表す言葉も豊富になる。アラビア語のラクダ、日本

語のコメやブリも同様である。それは言葉だけではない。生活のための道具をはじめとして、歌や絵にも反映する。さらには笑い方や歩き方のようなしぐさに至るまで影響するといえよう。例えば中国人と日本人とは顔形で区別がつかなくても、しぐさを見て判別できることもあるのである。

このようにみてくると、広い意味での文化（カルチュア）というもの、すなわち言葉や道具や歌や絵などは、その民族の生活する風土と密接にかかわっていることがよく理解できよう。ものの考え方もまた文化の一つとみるならば、民族によって違ってくるのも当然である。アラブの文化が川や森林の全くないサバクの風土と切り離すことができないであろうように、日本人の文化もまた、日本の風土と切り離して考えることはできないだろう。

もちろん風土だけですべてを割り切ることはできない。文化は伝播する性格をもっている。例えば文字というものを人類が使い始めたのは、人類発生以来何百万年の歴史の中ではかなり最近のことで、それも中国やエジプト・メソポタミアといったごく一部の地域だった。日本の場合は中国から漢字が伝えられ、最初「万葉仮名」として日本語を書き表すための文字になった。漢字の伝来までは、地球上の他の多くの民族と同じように、日本にも文字という文化はなかった。

だが、文化は国境を越えるものの、伝わったあとでは変化する。同じ文字を例にとれば、万葉仮名はやがて平仮名や片仮名といった日本独自の記号に変わって定着した。黒人音楽

（ジャズ）は、もともとはアフリカの音楽がアメリカに渡って発達・変化したものだが、アメリカからさらにヨーロッパへ伝われればヨーロッパ的ジャズに、日本へ伝われば日本的ジャズとして土着化するだろう。また土着化しなければそれは単に流行として過ぎ去り、本当の文化として根を下ろしたことにはならない。宗教も芸術も思想も、その民族固有の色彩が加えられて、結局は民族文化となってゆくのである。

それでは、日常の立ち居ふるまいから思想に至るすべての文化の中で、民族の存亡にかかわるような重大な核となっているのはなんだろうか。それを奪われることが最も致命的打撃となる文化は？

それは、着物でもなければ住居でもない。人類が毎日話している言葉、民族それぞれの言語である。ある民族から固有の言葉が失われるとき、その民族文化は最も重大な危機を迎える。反対に、極端な場合には人種的特徴が変わってしまっても、言葉があるかぎり民族文化は滅びないだろう。そのよい例がイスラエルである。ユダヤ民族が二千年前に祖国を追われたとき、人種的特徴は今のアラブとほとんど同じだった。しかしその末裔のはずのイスラエル人たちは、ヨーロッパ人とあまり区別がつけられないほど体質が変わってしまっている。長い間に繰り返された混血の結果である。しかし彼らはヘブライ語を公用語として復活させた。いかに顔形が変わろうと、ユダヤ文化の中枢は生きているということができる。

わたしたち日本人もまた、日本語という民族文化をもっている。この言語は、日本の風土や歴史・文化の反映として発展してきた。その特徴はいろいろあるが、例えば文の構造上の一面から見ると、これは述語中心の言語である。「太郎が花子に本を貸した。」というとき、中心になる言葉は「貸した」であって、あとの「太郎が」「花子に」「本を」といった言葉は対等の比重で「貸した」に係っている。つまり述語が他の言葉を統括している。だから述語が最後に位置する原則はあるが、他のすべては順序が比較的自由である。

ところが英語やフランス語だと、この場合は「太郎が」が「主語」となって冒頭に置かれ、さらに英語の場合三人称単数現在なら動詞にSが付く、というように、主語が他の言葉を支配している。しかし日本語の正反対、つまり英語やフランス語以上に主語の支配力が強い例は、アフリカのスワヒリ語であろう。これは主語の支配が他のすべてに及ぶので、英語にたとえれば動詞にSが付くだけでなく、「花子に」「本を」といった目的語まで主語によって変化する。

民族文化としての言葉はこのように大きく異なるが、それでは日本語と英語とスワヒリ語のどれがより「論理的」で「高級」かというと、三者三様にそれぞれが論理的かつ高級であって、優劣の差など全くない。また日本語のような述語中心の言語は世界でも決して珍しい例ではない。言語はその民族文化を反映したものであり、言語とはすなわちその社会の論理である。したがって「非論理的な言語」などというものは存在しない。ただ使い手がまずけ

ればどんな言語でも論理的ではなくなるだけのことだ。

民族と言葉との関係は、このように分かちがたい。わたしたちの民族文化としての日本語は、わたしたちにとってかけがえのない大切なものである。それは民族のよりどころとさえいえよう。しかし日本語を毎日話したり読んだりしているわたしたち自身、そのかけがえのなさをまだよく認識していない傾向がある。さきにわたしは、日本人は異民族に侵略された悲惨な経験が歴史上少ないことに触れた。言葉についての認識不足もこのことに関係があるかもしれない。反対に、他民族を侵略した経験となると、日本は過去の歴史にたくさんもっている。かつて日本が周辺のアジア諸国を占領したり植民地にしたりしたとき、そこの国の人々を最も怒らせ、かつ嘆かせたのは、日本語を強制してその国の言葉を禁止した場合だった。これは民族文化の抹殺に通じたからである。ドーデの有名な短編「最後の授業」は、ドイツとフランスの国境地帯でフランス語が禁止される悲しみと怒りを、少年の目を通して描いている。

空気のように何気なく諸君が話している日本語というものが、実はどんなに大切なものかを理解していただけただろうか。そしてこのことは、地球上の他のすべての民族についても、それぞれにいえることなのだ。日本語（日本文化）だけが大切で、あとの言語（文化）はどうでもいいというのでは、国粋主義・選民思想になってしまい、ファシズムへの道に通ずる

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com